りやすく解説したもの，1項目を2頁の読み切りにし，図版等を多用している。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『フィリピン銀行史研究 — 植民地体制と金融』

永野喜子著

御茶の水書房　2003年12月15日（xv＋356＋xxxi頁）

本書は，筆者の1990年代におけるフィリピン銀行史研究の集大成である。筆者が本書をまとめるうえで最も腐心した点は，これまでフィリピン史研究のなかで時折取り上げられてきた，第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄の実態に関する包括的解明である。従来の研究では，第一次世界大戦直後にフィリピン国立銀行は深刻な経営難に陥ったが，その原因はもっぱら，当時同行の経営権を掌握していたフィリピン人幹部が近代的銀行経営の知識をもたず，旧来の政治・経済界の人的関係に依存しながら融資事業を展開したことにあるとされてきた。

しかし，銀行史研究を進めるなかで，著者は，第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄の全貌を明らかにするためには，従来の経済史研究の手法ではどうしても解けない問題があることに気づき始めた。そのひとつは，植民地の通貨制度を維持するうえで中央銀行がない時代にフィリピン国立銀行が果たした役割について突っ込んだ議論が必要なこと，もうひとつは，フィリピン国立銀行疑獄と通貨制度の同様との関連を明らかにするうえでは，フィリピン政府の政治・行政機構はもちろん，アメリカ本国の植民地管轄機構である米国陸軍省島嶼地域担当局 (BIA) のフィリピン通貨制度維持に対して果たしてきた役割について深い洞察を得る必要があることであった。

本書は，1998～99年の神奈川大学長期在外研究員として，アメリカとフィリピンで実施した1年間の資料調査にもとづく学術研究の成果である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

文献解題

『フィリピン歴史研究関係マイクロフィルム3点』

① History of the Philippie Insurrection against the United States, 1899-1903, and Documents relating to the War Department Project for Publishing the History. US National Archives, 9 reels.

② Philippine Liberty News March 20, 1946-Dec. 20, 1946 Manila, 2 reels.

③ Voz De Manila, March 23-Dec, 7. 1945; July 4, 1946-Dec. 14, 1948, 2 reels.

本マイクロフィルム3点は、19世紀末から20世紀前半を対象としたフィリピン史研究にとって重要な史料である。①は、19世紀から20世紀への世紀転換期においてフィリピンで世紀した独立革命に関する史料である。この独立革命は、1896年に対スペイン独立戦争として勃発したものであるが、米西戦争とのからみで、1899年からは、フィリピン・アメリカ戦争として展開された。①は、フィリピン・アメリカ戦争期におけるフィリピン革命軍の反乱に関するものである。②と③は、1942～45年の日本占領期末期と1946年7月アメリカから独立を経た時期にマニラで発行された新聞のマイクロフィルムである。こうしたマイクロフィルムを活用することによって、既存の研究では得られない知見を獲得することができるかもしれない。

（文責：永野善子）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『菊池寛を読む』

日高昭二著

岩波書店　2003年3月25日（233頁）

本書は，2001年10月に行われた岩波市民セミナーにおける講義をもとに，〈岩波セミナーブックス88〉として刊行されたものである。芥川龍之介と並んで「新思潮」の代表的な作家のひとりである菊池寛は，その戯曲と小説に示された卓抜

な「技巧と主題」が取り沙汰されてきた。しかし，それは，大雑把な同時代批評がつくりだした表層的なイメージに過ぎなかった。たとえば，出世作「藤十郎の恋」には，元禄期の歌舞伎についての「芸談」を大正期のいわゆる「新歌舞伎」運動のそれと重ねあわせるとき，戯曲解釈と演出の存在による近代劇への橋渡しの実態がよく浮かび上がってくる。また有名な「父帰る」には，家父長制度の近代的な再編という主題が明瞭にあり，「恩讐の彼方に」では，明治六年の「仇討禁止令」に始まる近代法制度への移行による「道徳」と「法」の軋轢が見て取れる。さらにベストセラー小説「真珠夫人」には，高利貸を転じて約束手形や債権譲渡などの信用経済学の勃興に裏付けられた「愛と信」のパワーゲームを読み取ることが可能となる。言うまでもなく，歴史と文化の記憶のなかに，文学テクストの言語的な表象を「読む」試みに他ならない。

なお，本書の切り口の一つである〈仇討もの〉というジャンルの近代的編制については，日高の編著『近代つくりかえ忠臣蔵』（2002・12，岩波書店）が，これとほぼ同時に刊行されていることを言い添えておきたい。